

8 寛政六年『花供養』

底本 小林 校異 白鹿

花供養

(表紙・題簽)

(表紙見返し)

華の都の花の色々いかでかかずまへ
つくすべけむ。なかにもひがし山の
なかばなる花にならびの林ふかき
芭蕉堂の花供養に天華乱墜の
時来たり、其薫りやすみにみち、
道したふ人によるべたえず。千々

のくさ／＼をとぢあつめ、としごとこの
手向となし、かつ四季のながめとなる
めでたき供養なりけりと我輩
はあふぎ侍る。

寛政むつ

とらのとし

竹堂主人

あけぼのや花散空の浅みどり

鐘しづかなる蝶鳥の中

春しばしおもひ入べき山買て

刀さす子は旅に居にけり

ぬれ物と見事に出し紙包み

同じ名多き家五六十

月のため始て作る芋なれや

また鹿笛も化にふくらん

秋雨に手習ふ顔の猶よこれ

斗流

闌更

百池

芦涯

杜桂

月峰

古塘

車蓋

土卵

仏のめしに塵の付たり

恋衣心づくしにぬぎかへて

死ぬ記念を波に引れし

いつしかに楸の陰の穴になり

夏の月夜の風に賑ふ

母親の関さぬ戸口さしのぞき

厄もの捨る時は来にけり

都とてちら／＼雪の美しき

歌になるべき伏柴の貧

角蜂

俚花

薰河

李山

志諺

貫子

平吞

木貞

其叟

文字摺の半きえたる綾の裙

かつみ

夕日を出て見る人のあり

巾花

桜咲遠山まゆの雲少し

子坤

狐子を守る裏の菜の花

魯長

菓子鮎を童のもちし春の風

歌雄

鐘鑄終りし寺の淋しき

驢丹

飛越る川を隔て若狭道

米駒

背に負ふ猿の枝にすがりつ

丁江

村雨の巳之刻晴に照返し

旧国

立揃たる御柱を見ん

樗堂

憲清も世を遁たる身の安さ

一峰

五合の麦の歳日立しぞ

都雀

水絶て残る家鴨もくれて遣り

冠叟

胸かためつゝ妻隔て住

其成

片しぐれ色なき樹々は降もせず

在貫

石も巖も皆羅漢なり

唐水

月かけて深草越る友二人

巢居

右一巡

魚は見て深く入らし花の人

水口

蜷州

みな活て桜を出たり芳野山

石部

良美

下臥に花の風ひく夜明かな

、

亀淵

上臈の花の塵ふくめませ哉

、

花井

坊が戸をたゝく夜中の桜哉

太田

嗟雀

寝転んで門の花見る奢哉

舟木

圃丈

青空に花ちる竹の嵐哉

彦根

繡虎

遠かたや奈良茶炊て花供養

長ハマ

此得

日ざかりや軒をはなれぬ花の雲

、

桃岸

けふもまた花見て暮す鐘の声

草津

月桂

花の会や白雲めぐる双林寺

、

来石

○

我もけふ花を供養の茶飲連

高宮小栗舎 男

花折／＼守や機織妻戸先

女 ちせ

世に隠れ花に出娑婆る供養哉

七十尼 寿惣

紅ともうつり心ぞ花の露

十二才 いく

紋の蝶を誘ひに来てか花の蝶

十才 野恵

花につれて人中みせん親心

紫石

くちぬ名はたゞ有明の桜かな

日野

暁月

花はまた根にある枝ぞ春の雪

山上

鷺橋

枝折戸にかけがねはなし留守の花

杉江

素風

たのもしや裏門はみな遅ざくら

辻村 女

りき

さくら人みどりの髪はそゝげたり

草津

可能

此筋や水に癖なき花の山

篠原

暁宇

山ざくら外は真黒に暮にけり

駒井沢

柏由

山なりに夜は明にけり花の雲

辻村

千鷄

○

心根や海ながめても花曇

加州金沢

松菊

我あとに花見の続く山路哉

槐路

棟ごしの花はてしなき府中哉

麦歌

たらちめの手をとる花の山路哉

女

英子

しばらくを樽で夢みる花の下

対山

相人なき酒のみくれて散桜

更々

我が馬としらで過けり花の雨

金沢

兎文

○

木のもとや雨もたくめず山桜

金沢

朶山

金氣流る春の岩壺

脇ざしの細身を好む日永にて

しばしかげろふ盃の月

追／＼にぬけて出たる鶴の売

石の粉たゞく納屋の内場

けふも又（魚編耶）ばかりの手ぐり網

涼しう成て眠気つきけり

○

楽阿弥の花とやいはん遅ざくら

松菊

槐路

山

菊

路

山

執筆

宮之腰

竹之坊

澄陰や忘れし比の遅桜

柏野

麦風

しるべせし池の奥あり花供養

其叟

○

花とし／＼人の柔和に薫る哉

馬來

啼声近く巢に帰る鳥

楚流

磯くさき笹屋の春に朝寝して

挙遠

かゝりの縄をしめる茶袋

南峰

月の秋何処へもち行起し土

素兄

築崩れたる川上の蔦

犁松

御所村に打出す礎ゆかしくて

下略

九重や花につぼめるうす煙り

うら風や柳がもとの初ざくら

花の枝かりやに朝の雫哉

こと／＼し桜に長が木戸がまへ

花の空翌日の天気もみゆる哉

日の入や花の間／＼人の声

○

北雁

挙遠

南峰

犁松

北雁

素兄

楚流

よく咲て心ぐるしき桜かな

車大

しら雲のさくらにつづく尾上哉

世涼

雨雲や桜見たらぬ峰の坊

季風

並松のとぎれに旅家の桜かな

我々

○

草臥ておもひ捨けり夜の花

能登黒島

珠卜

山の尾長く打霞む軒

麦秀

色うすき雲丹一壺に春闌て

素玉

膠細工の人の耳とき

玻井

かたむきし月の芒に風起

稀に虎伏露の岩もと

亡人の魂をしたふて庵結び

うきに曇るか夜半の灯

中空を鳴行雨後の子規

つゝきノ丘の若葉ひたうつ

糸買の細きもと手を奪れて

子の目のさめる宿の暁

水瓶にきよくもうつる月寒

錦川

館分

文朝

柳汀

顔山

玉史

布遊

犁邑

岐草

馬涼

秀

雪になだれし寒竹を伐

をの／＼も小社詣での塗木履

猪頭に見ゆる守影が妹

うつろひしふた本梅や匂ふらん

酔桶干たる陽炎の中

蛙啼井出の流に身を寄て

濃き墨染の衣ぬはるゝ

暑き日に渋の香のする挟箱

松や榎にくらき片町

山 邑 遊 史 朝 汀 玉 井 卜

寝つ起つ髪もおどろの狐付

瓢たがへてうつゝなるさま

海あれて小浪のかゝる障子越

宵の千鳥に百々の詩

酒を酌みつの笑ひの別路に

石に樗の実の盈れけり

鶴はしの鍬を尋る月の前

下部の多き左衛門が秋

一の戸の馬の使に馬に乗

涼 草 卜 秀 玉 井 朝 汀 山

川のすそより黒雲のたつ

傘のあぶらも引ずならべ置

ひさしのさきのぬり蜂を追

咲うはる花に童の打交り

空しづかなる閨如月

○

花にめでる心覆ふや朝曇

花もどり常にさへうかれ女かな

手のひらに花くふ虫を這せけり

史

遊

邑

草

筆

馬涼

文朝

顔山

ぬれかへる時雨さくらの夕哉

あり明の桜に騒ぐ鳥かな

花の雨知らぬ庵の情かな

山遠く松を見こしのさくら哉

猿狂ふ桜の中の小社哉

午時過や花の主の坊が軒

此頃や人になれたる花の鹿

○

峰たかき花に澄るか天の川

布遊

玻井

素玉

麦秀

柳汀

犁邑

珞卜

玉史

錦川

朝霜に老木の花のからびけり
すべり道こらへて行ば桜かな

館分

岐草

誕舟

○

散さくら己が眠りを驚かす

三階

吳暁

山水の気を咲こめて桜哉

川田

佳超

桜見て外に見る物なき日哉

、

乃室

花さそふ嵐に鳥の高根哉

田鶴ハマ

李澄

島山や楫の音よりゆふ桜

東馬場

雨柳

花の香やくれて戻りの道遠し

高畠

西枝

花の香に人の出て居る夕哉

曾根

珠翠

○

まくり手の袖にすがるや花雪吹

道下

青泥

侘住や野に山ざくらみゆる里

能登部

朝々

白がねにかへてかざすや初桜

、

金丸

雲動く花白妙の真上かな

、

麦杜

○

横鞍に乘行花の麓かな

越中放生津

大西

散花やすべりし髪に付て行

、

麦秀

さくら／＼咲衰へる年もなし

白老

ものゝふの心もどせる桜かな

宣令

波だちてわたり絶けり島の花

二上

駕のわたし越れば花見心哉

大一

世の中の道を付たり山ざくら

蟠龍

世をいとふ人も交りて桜かな

歌亀

馬下りて衣紋つくらふ花見哉

里泊

市よりも多かる人の花見哉

梧報

いも顔の被ぬぎたる花見かな

星府

人しらで太り過けり山ざくら

二翼

○

比しもや山ざくら戸へ樽ひろひ

高岡

白雪

年／＼に人あたらしき花見哉

福野

如台

初ざくらちる日はことに花見哉

、

三秀

漣やさくら動きて橋むかひ

越中

白麻

そよとふく風も重たしいと桜

女

桃河

片手綱ゆるむ桜の山辺哉

ノカヒ

千友

○

煤けたる扇をさして花見哉

越後十日町

桃路

都にて花すり衣ほころびぬ

白根

文丞

○

花踏てねる夜もあらん夜の鶴

上州草津

鷺白

花瓶にやさしよ蝶の額づき

菅菰

蝶いくつ匂ひ尋る花の前

石魚

思ひつゝ寝れば夢に桜咲

柳水

薄月に花さがしみる林かな

魚柵

かり家に毛氈敷て花見哉

許一

花の山しらゝに明て朧ちる

夜雪

花に今うたかたとなる入江哉

七十一翁

葵水

山ざくら雲より上の枝もあれ

涼眉

いく山や霞分行さくら狩

狩宿

淡水

○

山寺や花見えそめて遠一里

宮崎

朔宇

七枝の角ひろひけり花の山

以貫

散花や入日の松に鐘の声

齋春

凍解や花に下駄はく行もどり

一ノ宮

羽黄

花の暮戸さゝぬ庵の明り哉

尺龍

散さくら夕日かすりて鳥の飛

戯月

花もどり一里の道の月夜哉

下仁田

暁鳥

磯山の花や帆にちり浪に散

松井田

松和

山桜遠き闇より灯影来る

塩町

専車

さくら哉こゝらで草鞋はき替ん

都堀 女

さか

狂者なるべし雨夜の花に小松明

島村

万戸

駒つれて繋ぐ木もなし花の山

駒形

岸苔

消残る雪や岨路の花一木

荒牧

亭祖

忘れては帽子撫けり花の雪

上州本宿

兎豪

春されて深山のさくらあらはるゝ

、

語山

命うれし今年も花の京上り

、

龍山

○

かくしては友さそはんにはつ桜

マヤハシ

吳川

さかりなる桜に重き寢覚哉

、

素汐

雨後の花雫流て色深し

、

素舟

酔さめて夕風寒し花の山

、

素太

有明や花をあるじの二日酔

、

米砂

○

花曇梁つたふ昼の鼠かな

蓮沼

似鳩

山ふかみ薄匂ふ花の曇かな

、 積

螺冥

花の山遠き花より暮にけり

、

詠帰

昼は嘸朧のさくら香の匂ふ

女屋

一尺

おもしろい道に迷ふや山桜

、

黄口

花の山どちら向ても盛哉

樋越

素栄

棹とめて花の山みるいくて哉

横尾

如泉

おもしろき浜の真砂や花供養

靱負河岸

雨夕

○

花雪を瀕して残る月寒し

シハ

南楼

山めぐる霞静けしゆふ桜

、

湖嵐

一方は花に明けり柵の闇

鶏更

片里も人の来るなり糸桜

、

魚道

灯を含て遠きさくらかな

、僧

画山

○

捨がたき世となんしりぬ初桜

奥州ツガル黒石

子尚

よい時に成て降せり花の雨

李耕

山ざくらかりに酒うる住居哉

灯の影や鳥驚て桜ちる

雨はあがり風和してのち桜かな

落る日の高くみへけり山桜

むつかしと柴の戸たてる桜哉

桜咲て世話敷宿や八重葎

花の山火もやす処／＼哉

いたづらに過て花みる三十日哉

家ひとつ桜に埋む麓かな

斗山

千里

文興

梅中

亀文

湖月

斎之

閑窓

嵐水

白雲のさくらにうつる夜明哉

茶川

花のもと久しい人に逢日哉

凡鳥

牛買て花の中行男かな

梅成

○

しのばれぬ花の時かや大根さく

ツガル

呉江

夜ざくらの猶しづかさや神仏

仙台

鉄船

花の山うしろは杉の曇哉

南部

鶏路

山ざくら奢らぬ嘶聞にけり

出羽湯殿

可筑

花三夜いりてや花の夢もなし

相州赤羽村

飯扇

いそがしや桜に狂ふ我こゝろ

、左沢

素風

夕暮や桜にうつる塩やの火

、

露橘

○

桜見てさとりし人はいつの誰

武州江戸

泰昌

世の中の人の多さよ山ざくら

、

風化

はつ花や手折ば雪と消ぬべし

、

侘雅

しばらくは人に山なし山ざくら

、

鳳声

散捨て尾上の花のしらけたり

金久保

民友

そろ／＼と人から暮るさくら哉

上高野

蝸牛

花咲や名もなき山に人群る

勅使河原

無塵

出来るや花に茶を売人のひま

、

快馬

花ありて人はほこらぬ浮世哉

江戸

貞松

○

軒の花暮に対して鼓うつ

、

菊明

夢に見しさくらをけふの詠哉

金久保

五毫

桜さかりしかも鐘楼の建かはる

、

花叶

吹越して浅黄桜の散日かな

粉川

白選

狩衣をかけし古木の桜哉

、

民化

むら雨や夕山ざくら蓑に散

亀岡

笑魚

早乗の駒かけめぐる桜かな

金久保

尔来

○

隠れ行月にさくらの散日哉

本庄

双鳥

岩踏ば花にはづれん二日月

、

浙江

さくら／＼海は夕日のうつり哉

、

素溪

花守が猿つなぎたる柱かな

李明

○

月うすく桜に曇る夕かな

安房磯村

倭風

小はら女や花によごれし花雪吹

ちら／＼と花の顔ふく嵐かな

里の子のもの拾ひけり花盛

遠山や花の霞の朝まだき

去年植て今年花のあるじ哉

かつらぎや花の雪ふる麓道

散さくら我玉の緒のながき哉

月夜ざくら其いにしへを散れば／＼

曙や花の香みつるうしろ堂

路翠

柳水

此君

楚流

梅岐

其深

路求

省我

斗十

前原

、

天津町

散ときに旭さくらと成にけり

露仙

狩人のさくらに闇をもどりけり

思成

しら雲の下り居る園の桜哉

阿丈

魂はとくのぼるべし山ざくら

椀楽

散はなにとけぬ心を思ふかな

清澄山

丁々坊

顔見たし木隠れ月の桜人

甲州藤田

可都里

さくら狩さすがにはやきとまり哉

、

漢甫

日の入てはてを見せけり山ざくら

、

作良

投橋も花へ真向の直路哉

浅原

真帆良

紙板に桜うつろふ西日かな

市川

唐笑

うすくれて桜にみゆる人の顔

真須魚

花の香や御階を守る五位の袖

黒沢坊

○

手向山かけてさくらの匂ひ哉

山寺釈

無名

作り木の中にもしたり桜哉

、

和石

花咲て人をやどすや峰の茶や

、

梅林

糸ざくら君が折手にまどひけり

百々

令雨

川曲や花の見所落つかず

飯野

真都良

花のもとや坊主にひたすら世を譏る

、

静良

木のもとや花に丸寝の行脚坊

平岡

如雪

夜桜に人来よとてや摺火打

小笠原

静菅

○

岸陰や桜を帯て水清し

、

真都魚

花うらに風忘れけり松の上

、

都良尾

夜ざくらやみそか男に似たるあり

小原

石牙

○

花の蝶へ酒こぼし見る二階かな

信州塩名田 柯則

山川やさくら流て春尽ず

文涛

順礼やつまみ洗ひも花の瀧

文耕

山本や花にさはらぬはだか馬

楚水

しるしらぬ人とふ花の主哉

片倉 崎給

日ゆるみや花の香に啼鳥増る

今岡 胡龕

ちる花に服紗ひろげる娘哉

作者不知

夜桜の簀垣に移る矢取哉

下縣 元夢

雨の花ぬるゝも花のかたみ哉

、 伯水

散花に夕告鳥の啼音哉

山寺やさくらをし分薪折る

酒売のをのれ酔しか夕桜

○

夜ざくらや光をそゆる絵蠟燭

ちる花の瀧も朧や夕日映

散花の雨したなりにひつきけり

塵湿て花に日を見る旦かな

散花や風より起る人の欲

、

桜井

桃思

塚原

家副

飯田

蘭二

、

楚洞

、僧

忍阿

信州

巴楼

佐久八幡

燕子

咲やさくら散やさくらに空暮る

一正

夕付日さくらが本のあかり哉

飯田

壺伯

遠山やなかばさくらの一朧

、

蕉雨

○

一日はうき世の外ぞさくら人

奈良井

李蹊

其まゝに日は暮にけり花の雲

汝忝

松を吹風やさくらの山つゞき

扇之

夕山や松もさくらもはな曇

馬風

けふもまた桜に酔か捨坊主

山曉

ふき昏て誰まつ家ぞ山桜

之彩

ながらへて命むすぶぞ糸桜

初更

山ざくら花から花へ人も来ず

凡林

○

先ひとつ羅漢出来たり初桜

伊勢御霊

幡水

朝な／＼うごくは花かあらし山

津

銀袋

花の雲見下す高見峠かな

白子

夏井

負公事の山に桜のほまれ哉

、

宇兆

一夜かる宿の湯風呂や窓の花

四日市

馬曹

○

石山や石に散こむ夕ざくら

津

座聴

色も香もさこそ心の花供養

神路山

秋屋

花曇天窓の重き朝寝哉

白子

麴車

山ざくら我菴こゝにあらばやな

得車

はやもさけ桜はやさけ庭桜

九才童

還車

はし書略

おほかたはきたなき花見心哉

白子

獲車

未練の詩人酒に酔春

麴車

此弥生あらたに屋根をふきかへて

夕暮牛の声ながく吼

三日月はあまり本意なき影なれや

雨になりぬと粟かりにいで

関とりと祭角力にもてはやし

例の娘を又なぶらなん

大江山幾野ゝ道と打かこち

はれまたになき頃日の空

とらへ得し獣のさまを訴けり

、 獲 、 麴 、 獲 、 麴 、 獲 、

医者とよばるゝ宮のムラフサ長

萩植てすゝきも植て月も見て

松虫もなき鈴虫もなく

くれがての秋に来てぬる旅衣

もの乞よりて人にしかられ

雪ふかき幾野の坊の冬籠

囲炉裏に細き篠を折焚

里烏吹くる風に群騒ぎ

軍に利ある例いはゝん

獲、翹、獲、翹、獲

はかなくも夫の留主に塩たちて

骨にしみたる母のくりごと

怠らず都に米を背負つれ

清河原の秋のかげろふ

まだ山は*■ばかりの薄紅葉

月の戸たゝく風流雄の友

今様の声よきことは無慙なれ

影となる迄などはふれけん

入湯をはやとく／＼と進めつゝ

、 獲 、 麴 、 獲 、 麴 、

*「木」偏「備の旁部」旁

初ほとゝぎす我も次手に

呉竹を庵の垣ほに打かけて

うときもちかき壁隣かときよ

大声に吹笛だけのかしましき

和尚の髭のさて長き也

かきつめし花の供養のもしほ草

長閑き御代の伊勢の浦浪

○

興満て花を敷寝やひぢ枕

麴

、

獲

、

麴

、

筆

大和郡山

蘭陵

あだなれや高根の花に雲かゝる

女

葵夕

年／＼や行惜まれて散さくら

笠置之辺

峨乙

色や花心の花はうつろはず

郡山

興花

かたつぶり花に角ふる欲もなし

、

未央

山住や夜風そよぎて花もとむ

、

麦丈

○

寺／＼を呼出す花の手柄かな

河内長尾

路平

ふみ分し道なけねばや初桜

楠葉

一笑

京しらぬ深山桜のあるじ哉

招提村

雪江

精進の日に口をしき花見かな

交野部門

古光

夕陽の一重を花のいとどかな

枯木

李山

石潜る水にも花のにほひかな

星田

田毛

○

はち(ママ)

蜂密やさればぞ花のよしの山

ナニハ

旧国

舞うたふ世にそむけたり花の寂

、

丁江

終まで花訪ふ人の眉白し

、

画涼

夕ざくら花はみつれど唯淋し

、

巾花

やどりせん先花の人花のころ

、

蜂友

蝶ひとつ花のたもとに入日かな

不舟

草の戸をとふて尊し桜人

仙処

出入の旦は数あり花の山

青鯉

芭蕉堂へ詣て

西行の路うしなはずさくら哉

二柳

桃青堂の垣めはるころ

闌更

月夕べ此永き日を居眠て

祖竹

埒あらそふ鳥そゞろ也

柳

切残す裏の竹山風みだれ

更

つちくれにほふ夏の雨晴

竹

○

散花や紙屑ひろふ橋の先

伊賀上野

未塵

椀挽の屑たく軒の桜かな

賀江

いづれからくるゝぞ花の東山

烏夕

桜から夜は明にけり峰の雲

泉州サカヒ

矩流

花咲日ちる日の暦ほしき哉

南紀広

海牛

行春の手向に山のさくらかな

高野山

桂山

花を一ト目真黒きかねの鳥居哉

淡路

黛葉

けふのことつとめて出たり夕桜

遠州掛川

歌白

○

花供養花降花も閑なり

若州能登野

鬼雀

ものにとふ我ならなくに花の暮

小浜

巴龍

花にめでゝかまはぬふりや山桜

丹波柏原

朝瓜

うかる世にうかるゝ花の盛哉

我桑

ぬぎ捨し羽織埋めよちる桜

琴川

花ざかり猶水かはん白豆腐

李鶯

詩に歌にいとなき花の物狂ひ

南耕

雨気たえて夕月花をさぐる哉

大山

一巢

はなの山わたくし雨のかすり降

魯稿

月の雨花のあたりを時雨るか

武陵

明星の花にしらむや東山

翠実

野廁に姫遠まきつ花くれつ

梶原

洞々

花咲てしだるゝ若木桜哉

丹後河守

梅居

花に寝ぬ契か松に夕桜

網野村

仙僕

雲と見し桜に記る夕雪吹

琴弾浦

北洋

輩のふもと過けり山ざくら

ハリマ北條

嵐芝

ちればこそ庭に香もあり花の雪

小野

沾節

まよひ子に花をとらせて泣止め

、

君中

○

遅ざくら淋て尊し三室堂

但州生野

涼秀

ながめなき中にながめや雨の花

幾

風

むつまじく花に連立親子哉

弄花

薄くれて花を見越の流かな

文眠

蝶／＼や花にもゆかで涅槃像

作州久世

麦丸

山遠くなりて桜の曇かな

、倉敷

井角

我が影の傾き初つ夜の花

其綾

みよし野やまだき桜の山かづら

孤鴻

琴箱を見ればきのふの桜哉

斎雪

春ごとに見果ぬ花の手向かな

籬北

花の日や一年ぶりの人に逢

石州銀山片山

其蓼

傾城にあいそ付たり桜狩

、大森

臥山

行春に花の庭はく御室哉

佐和谷

眠人

虹起る尾上や花の夕霞

因原村

志山

○

供養の日ふるや誠の花の雨

備前岡山

子坤

花ざかり猿に盃投て見む

備中倉敷

玉井

雨はれて澄のぼる月の遅桜

、

寄人

山城に大和重ねて花の雲

阿波徳島

枝舟

寺に来て人柄作る花見かな

徳島連

親二人持て花見し昔哉

サヌキ仁保

指馬

来る人の花にたよらぬ袖もなし

高谷 僧

三志

風の沙汰しばらく絶て遅桜

予州西条

梅里

此頃や行もかへるも花見人

備後福山

李朝

木食の山しづかなり遅ざくら

高木

可卜

夕ぐれは花にとゞまるあらし哉

田房

古声

○

雲下りて花にくはゝる夕哉

三原

波松

鳥の糞もつけてし花見車哉

、

墨水

散花を空へとさそふ嵐かな

、

逸芳

ちる花を魚の噴く風情哉

、

五沖

絶もせで花にまつへり尿かづら

、

何笠

外の色は海のみ花のいつくしま

芸州広島

六合

木の端の榎も花の木陰かな

広島

古江

都にも留主の家あり花の春

能美しま

雨舟

京に出て遊ぶにせわし花盛

小方

可友

内外の花も尊し寺の門

長州下関

水唐

山ざとや花散ごとを白の唄

防州上ノ関

百樹

はるの中あらはれ出し桜かな

、

雄芝

○

深山辺や花にきえ行人の声

長門厚狹

羽翔

ひさぐことしらぬ里あり花の奥

、

文尚

花の香や小鳥の群る日の移り

、舟木

梅梢

雲と咲雪と散つゝ花の山

、

桃雫

白雲と思ひ入りさくら狩

、

仮遊

時なれや我も供養の桜人

、

梅月

夕風や爪音たえて桜ちる

、

雪鳥

油せる女の髪や散さくら

、

波月

○

狩暮てふたゝび迷ふ桜かな

防州小郡

桃林

駒とめて里の名とはんはつ桜

、長川

錦水

詠けり月に桜の黒むまで

花咲や田舎の春は捨られず

咲てちる花なればこそ此色香

町中やうき世の外の花一木

立よれば木の下寒し山桜

朔日や花ににぎはふ里の者

三月や名なきさくらの軒に散

しのびきて友思ひけり夜の花

花の酒木の下陰に眠らばや

、

志高

、

如光

、岐波

不尤

、

羽仙

、

春郷

、大海

羽琴

、

琴那

、下津令

明羅

、室津

鯨牙

はな紙を扇につかふさくら哉

東溪

ちる花の記念にみるや峰の雲

、山口

無心

鵬の花に居眠る真昼哉

蘭台

夕なきに老木の花のこぼれけり

、

波光

風たえて夕日に湧くや花の山

、

李蹊

春や都人色／＼の花あそび

芦舟

道くさのなかは青みてはつ桜

、

巴龍

夕暮や鳥ふくみ飛寺の花

、

雨竹

等閑に花の雪ふる夕べ哉

、

桃之

米洗ふ流に花を汲るかな

、
鴉跡

灌壺に桜ちりこむ詠め哉

、
鴻南

花の酒幕の外みぬ人も有

、
孤月

足跡に桜うづもる野寺かな

、
河柳

磯山や波につらなる花の雲

、
天民

袋草紙てふ物をひらきて

日のめみぬ風の祝部や花に泣

、
万井

黄鳥諷ふ松の朝月

、
天民

幽なる谷の細道雪解て

、

都に近き酒の味ひ

人足のかはる晦を駕の夢

竹の葉末にかゝる夕雲

○

むべなるやけふ散花の常ならず

憎からぬ童や花の雪つぶて

花のふゞき机にゆるむ睡かな

我に吹風なわたりそ花の上

二ツ三ツ咲ても花のさくら哉

長州赤間関

井、民

羅風

麦子

里江

花休

指月

風絶て散をさくらの誠かな

暮て帰る花に浮世の名や立ん

散花の夕暮寒き一重かな

山寺の花に対して眠かな

橋ひとつ渡れば曇る桜哉

思ひ出にさかりの花を狩日哉

盃に散やさくらの何地より

瀧水のひびきに散や山ざくら

月夜にもあらで盛の桜哉

芦舟

浪和

市冠

嘉星

松雨

芦盛

名那女

梅童

琴左

少年

此庵は花を友にや暮すらん

散花を詠る僧のなみだ哉

山川やよどみ／＼の花いかだ

花に来て花より嬉し花の友

うちはらふ袖や花降小雨ふる

分入れば眼くらむ花のふかき哉

あら樂し老を交へて桜がり

世の中はたゞにさくらの一重哉

などてかく散時花に人なきぞ

浦雪

思玄

箕雪

路明

里芳

仙梨

阿声

里山

薰里

○

瀧水や雲に散り又花に分

筑前飯塚

竹両

朝淋し不断桜の散残り

、

舎丁

石亀の水はなれけり花の本

、

士沢

我さくら客よぶほどに延かぬる

、若松

可十

餅酒の俗を離て花見哉

若宮

蘭溪

ぬすまれて感ずる花の主かな

文鯉

踏こむや花のあらしの亀尾山

、黒崎

其柳

うす暮や笠も花降現世町

、芹屋

朝三

花の山夢はあらしの上を行

木屋改

青而

分行ば青葉匂ふや花の中

、

木耳

埋むごとく寺は暮けり花の山

直方

可角

谷川や梢は花に水えらむ

、

君花

○

ざぶく／＼と渡来て花の東山

、

此原

虚無が家の留主預らん花曇

、

寄木

高まさる浪に散らん磯の花

、

元二

花の世や所定めぬ初ざくら

、

白移

日をかさね朝みる花に眠りけり

、

曙川

夜曇や花に心のはこぶとき

、

遠子

硯ほる額に花の光り哉

、

桃雫

雲雪と花を呼こそ無念なれ

肥後熊本僧

潭月

碇いればはなものはず島巡り

豊前田川

蘭丈

人ちりし跡や桜のちる心

豊後高田

山離

○

桜散てをさまる春の心かな

肥前諫早

榎江

散かゝる花にまたゝく座頭哉

像華

忘れても折な社の花めぐり

旅人の灸すゆるや花のかげ

傘留て見るに友なき桜かな

朝まふで花汲ながす手水哉

岩はなや波の折／＼ちる桜

夕暮やさくらが本の人よばひ

花に暮月も花から白みけり

さくら狩幸いけふの薄曇

咲さかる花にまばゆき日中哉

女

霞紅

夏蓼

娛洞

梅枝

春芦

里石

代の

春向

一興

半葩に花吹入るゝ社哉

花の雨鷄も聞へぬ宿り哉

岩の花去年の足跡踏にけり

○

二人見し花にことしは三たり哉

さくら咲山やさま／＼鳥を聞

山ひとつたゞ在明のさくら哉

散比の人甚し遅ざくら

きのどくや桜に見する夕日脚

、

如藪

、

飛音

、

淡波

、

文塘

、

梅路

佐賀

交更

日向美々津

一甫

肥後長峰

連山

さめてあれな家土産せん花の酔

芳山

事たりぬ花見るけふの此命

外山

指剪て花の価やむかし人

熊本

飲露

花の日やしらぬ小鳥の打鳴て

亀倉

御車やさくらにあらき宿直人

湖東水口

梨風

雨催ひ灯に見んよるのはな

作者不知

よしや世は転ぶ処を花の宿

行脚

丈左坊

桜くれて聞へず成ぬ祢宜が笙

龍尾

東雲や薄花ざくら峰に降

瓜坊

○

雲か花か鐘つく峰の朝朗

サツ出水

春后

花垣の庄は耕す盛かな

、

立蘇

寝てもやゝ花に置くゝ心哉

阿久根

朝瓜

さくら花散る日は空の曇けり

、

机翠

さまに来て一夜に花の嵐哉

鹿児島

関叟

○

まだ咲ぬ花にもとゞく心かな

山城八幡

古律

ながめふりて花やにこもる山桜

城南

魯長

山引の舌うるほしぬ花の雲

鬼荊

携ばいとゞ花散る真上より

舍樹

植置しさくら見に行社かな

貞雅

来る人の花にたまらぬ袖もなし

宝珠寺

三志

花の中心すませば匂ふかな

深草

巴橋

花最中斎のあした静なり

磯水庵

○

羽織着て酔はぬ女や花の本

大住

鋤月

関越へて見返れば散さくら哉

子鬯

おもしろや月も日もある夕桜

長池

花月

酒にあれ花にはたらぬ夕哉

ビハノ庄

鬼笑

山の井も花の案内のひとつ哉

イノヲカ

戸口

散花にいかでか鷹の眼つき

天神森

平水

ちる花にうまく眠れる舎人哉

ト

五牛

○

夜は花に明行花の動き哉

寺田秦夫事

南和

行こせば袖に花ちる木陰哉

、

雲裡

散かゝる花にとりの酒宴哉

、

良水

散髪のさはる下枝や花のまく

サカ

一鳥

花咲てとゝのふ片輪車かな

、

杏露

塵のうく水は音してやま桜

、

落口

○

花の色は丸気に光る入日哉

百池

西山や太秦までは花曇リ

嵐月

下り坂や桜の上の昼の月

土卵

夜に入るや桜散つゝ酒醒る

渭川

世にたがふ名のみ桜の盛哉

角峰

山陰やさくらにかゝる朝の雲

咲と散と花の境や山かづら

花の香の敷て去ぬ月の前

花に着し蓑なつかしき夕哉

夜の花しづかに床の灯影哉

月にしのぶ古郷わすれて花見哉

淀む江に嵐の花のうき沈み

照月に一しほ花の詠かな

格別に詠もふかし遅ざくら

尼

杜桂

平吞

薫河

晨龍

桃李

淡雪

奥人

歌女

庚達

松一木ともに桜の曇り哉

最一日人にみられよ山ざくら

雨催ふ滋賀の桜に曇けり

花の中人うるはしき往来哉

目に付し花ちり／＼の浮世哉

花の山飯貝へ下りて雲白し

柴の戸や一重桜に朝の月

山ざくら松に月みて帰けり

うかれ出る花に幾日の翁哉

指月改

兔毫

許霖

虚舟

江蓼

以菅

魚泡

志江

漢水

玄都

天に人ありなばくだれ花に月

驢丹

盃のまだもつれあふ桜かな

二雷

巡りあふ人の告たり遅桜

車蓋

生田旅泊

沖鳴や沈てにほふ夜の花

紫暁

花に競ふ人の中より散桜

甫尺

花の旅見めぐりの神に誘れぬ

虎白

月照やさくらにかゝる雲もなし

尼

俚尤

九重に匂ふや花の蘭奢待

蛤夢

雨のさくらら伝ふ雫の詠哉

貫子

日の落て花のしらめる雲間哉

木貞

旅人や花に袖ふる半合羽

五芳

水底や花にあかるき大井川

在貫

みちの晴花に動かす心かな

不木

跡とめて匂ふや花のあみだ坊

月峰

松と花とまだらに雲の嵐山

定雅

○

むれつゝも花によるべの翁堂

都雀

嵐きて机の上やはな臙

斗雪

東雲や花の中より顔よ鳥

梅斜

山ざくら我もおとなになりけり

煤価

子共等の論語よみけり庵の花

凡二

雫して奴娜なる花の旭哉

大梁

二月やかねてまうせし花誘ふ

杞柳

咲とちる其中よりぞ花供養

其成

森少し神ありてさくら椿哉

白黛

○

花に笛や儀同三司の御齡ひ

長広

寒く明て次第に花の日和哉

唐水

嵐山花も花也のどかなり

以外

花に風酒のみたらぬ日ごとかな

古塘

暁や虻もひそみて花の枝

一峰

まだ散らぬ花の匂ひや雨の朝

尼

得終

朝ざくら水汲みのぼる尾上哉

米駒

咲花に名高き峰の小寺哉

在京

都夕

花ははな寂寞と成にけり

かつみ

見おろせば日裏の花も盛哉

芦涯

煩悩の犬ひきつれて花見哉

あふひ

いつのとしにかありけん 我も来て

桜に科をおほせけりと共に詠め

あひける春の気色にはとかはりに

雨降て科なき花と成にけり

蘭更

追加

伝へしる其俤や花曇り

石州銀山大森

撮龍

みないとなみを結ぶ糸遊

聞明

蝶／＼のけふも野末に集りて

芦江

衣の袖の垣にかゝりし

臥山

月さしてたうとがりける潦

聞明

よはるきぬたにつやの出る汗

撮龍

○

ふり返り古郷見にけり旅の花

芦江

我こゝろけふは桜にまかせけり

臥山

○

花くれて杖に力のまさりけり

ツシマ

孚湫

花の雲の上とや妹が生れ里

遠州

白萩

狩くれて酔人を花の片荷哉

近江坊むら

蓮車

谷川の流れてしるし山桜

洛

一虎

暁やきのふの花のあたらしき

、

芭洛

居ながらに都の花や如意ヶ嶽

大ツ

井子

手折来て置所なき桜かな

ワカサ

左橘

夜ざくらや花の木の間の咳払ひ

栗津

重厚

○

酔ざめの顔ちる花にふかれけり

南部八戸

仏更

朝虹やはつかに花の林より

、

我文

磯山や一木さくらの夕あかり

、

卯兮

片泥障うち敷旅の花見哉

信 上田

麦二

世や花や散鬼が末も只のひと

、

如毛

君が代や親を負行花の中

、

玉馬

散さくら人にあきたるけしき哉

洛

冬陽

○

雲のぼるかたはらに花咲にけり

近江水口

雨盥

花の木にのぼるをとむる主哉

、

朝露

月影を巡りて花の独かな

、

松露

夜の花人に狂ひし鳥一羽

貫志

花の月曇ながらに明にけり

近江

来小人

夜ざくらや処／＼に星の影

桃溪改

毛挙

麦食ふて花待里の如月哉

田川

ノノ庵

花の雲番ひの鶴を見付たり

洛

鸞台

ならはしやさすが嵐に山桜

筑前若宮

石睡

臼転す先に花散る山路かな

、

瓜颯

散花や裾はづかしきなら草履

、女

つる

髪ときて見られに出たり花の山

行脚

花蹂

おろ／＼と竹やたはみて花暮る

豊前小倉

吾嶺

ぬし見えぬ夜の車にさくらかな

筑 植木

湖桂

鐘の音や埋もはてぬ夕桜

ナニハ

不休

散花にやゝ別れたる小蝶哉

、

文屑

うか／＼と人に連るや花の中

春芽改

志仙

雨の雲ふもとの花にかゝりけり

洛

光暁

月と共にながめて行／＼山ざくら

稻肥

湯あがりには雨後の桜の詠かな

酒井

色見えて道廻りせりやま桜

林沙

日の中や紅かけし花の枝

湖東水口

青楓

夜の花つばさに動くねぐら哉

、

素水

長閑さや花にうつゝの樽枕

、

其交

花さくや此山中に下駄のあと

、

可石

行／＼て花にとまりの覚悟哉

志摩鳥羽

蒼梧

人につれて名のなきさくら好み哉

イセ白子

無曲

此供養いにしへの花今の花

、

帯川

花守の棒忘れ行酒宴かな

湖東新城

青牛

【校異】白鹿本の本文はここまでで終了。

花に来てうき世心の起るかな

城醍醐

百哺

すれ合て散を桜の風情哉

方舟

夜桜や草にそみたる酒匂ふ

奥州

金英

寛政六甲寅三月

京三条通寺町西入

蕉門俳諧書林

菊舎太兵衛寿梓

(裏表紙見返し)

(裏表紙)